

幸せに生きたいだけ。

旭川市立忠和中学校 2年

佐藤 鞠衣（さとう まりい）

私は小学校五年間ずっといじめを受けていました。今でも思い出すだけで悲しさと心苦しさを、いじめをしてきた人達に対する怒りが込み上げてきます。「なんで、こんな思いをしなければならないの？」「私はいじめられて苦しいのになんで相手は幸せなの？」この作文には書ききれないくらいいじめの相手のことを恨んで、羨ましがってそのくり返しの日々を過ごして、みじめになっていました。

私が初めていじめを受けたのは小学一年生の時でした。元々、私は砂川に住んでいて、年少だった頃に旭川市に引っこして来ました。まだ、友達もできていなかった時、私は不安で心がいっぱいでした。毎日、不安と新しい生活への楽しみでどきどきしていました。その時、私に二人の友達ができました。二人とも近所に住んでいて、とても仲良くしてくれました。ですが、仲良かった一人が引っこしてしまったのです。仲良かった二人の友達の中で一番、仲が良かったので、とても悲しかったです。私は悲しい気持ちの中、そのまま小学校に入学しました。それから時間が経ち、幼稚園でできた他の友達や小学校でできた友達、仲良かった友達と楽しく学校生活を送っていた時にいじめが起きました。いじめてきたのは仲良かった友達と小学校でできた友達でした。いじめの内容は私の見た目のことについてや言う事を聞かなかったら悪口を言うなどでした。とても苦しかったです。自分の意見を言うだけで苦しい思いをするのが本当に苦しかったです。二人は「自分のやっていることはいじめでは無い」と思っていました。先生と親が話し合った時には先生が「お母さんが病気だからいじめられている。」と言っていました。母親の病気については無関係なのに悪く言われることにとっても申し訳なく思い、死にたくもなりました。一年生のいじめは小学校五年間の中で一番ひどいものでした。理不尽な理由で首をしめられたり、口の中をさされてけがをしたりと精神的ないじめだけではなく、暴力的ないじめもありました。

二年生は悪口。三年生は仲間外れや暴力をしたと濡れ衣着せられる。四年生は思い通りにならないと悪口を言われる。五年生は悪口。他にも様々なひどいことをやられました。からすよけや不審者が来ても大丈夫なように登下校を無理矢理、一緒にしてきたり、自分の思い通りにならないと悪口を言うなど理不尽なこ

ともされてきました。本当に辛かった。

でも、私は友達に恵まれていたおかげで、ここまでやってこれたと思います。いじめがひどく、不登校になった時はクラスの人達が折り紙や画用紙で作った物、手紙などを入れてプリントを届けてくれたり、仲間外れになった時に入れてくれたりなど様々な場面で助けられてきました。自分の気持ちを理解してくれる人達がいて本当にうれしかったのを今でも思い出します。本当にありがとう。

いじめは子供だけの問題では無く、大人の問題でもあると思っています。親や先生などの周りの大人がどのようにいじめを受けている子供に接するかによって変わることがあると思います。話を聞いてくれるだけで少し、心が救われるところもあります。一番大事なのは話を聞いた後の反応です。何を言えばいいかわからない人が多くいると思います。でも、一言でも良いんです。例えば、「勇気を出して話してくれてありがとう。」や「もう、大丈夫だよ。」など向き合ってくれるだけでうれしいんです。本当に苦しくて、辛いことを話すのはできるならやりたくないし、大人に心配をかけたくない。でも、自分を守りたいから自分の命を守りたいから一番、守ってくれると思う大人に相談するんです。しかし、大人は子供よりも忙しかったり、子供の頃の常識が今と違ったりして「めんどくさい。」とか「いじめられているのはお前に問題があるからだ。」とか言うしっかり向き合ってくれない大人がいるのが事実。私にも経験がある。北海道教育委員会の電話相談で相談した時、私は人と会話している時にどうしても泣きたくない思いがあり、わざと明るい声で話していました。最初は「それはいじめだ。」と言っていましたが、段々話は「今回のことは将来につながる学びになった。」ということになった経験があります。話す声の明るさから「この人は大丈夫。」と思われたと思います。でも、もし、他の人が私と同じ明るさで話したのがその人の元気が無い時の声だったら？

私は両親や友達、一部の先生がいじめに理解して解決しようとしてくれたから良かった。でも、誰も理解してくれなくて自殺をした人も多くいる。いじめを受けた人しか分からないことも多くある。だけど、相談されたら話をまず聞いてほしい。話した勇気をつぶさないでほしい。人権が一人一人にあるなら私にもいじめを受けている人にも自殺をしてしまった人にだってある。幸せに生きたいだけ。

思いやりと人権

旭川市立愛宕中学校 1年

越後 実結菜（えちご みゆな）

「人権」とは、全ての人が生まれた時から持っているもの。安心して生きていける権利。その権利を他の誰かが奪うことはできません。してはいけません。普段は何気なく考えていましたが、改めて考えてみると、色々な生きづらさを感じている人は少なくないのではないかとということに気づきました。障がいがある人。ジェンダーで悩んでいる人。いじめを受けている人。本当はいじめたくないのに、従わないと自分がいじめられてしまうと思っているひと。みんな心のどこかで違和感を感じている。「普通の人とは違うから」そんな理由でいじめられることも・・・

普通とは何でしょうか。

自分が思っている普通と他の人が思う普通。どちらも同じとはいえないと思います。人それぞれに考え方があり、十人十色ということわざがあるように、十人いれば十通りの考え方があります。同じものを見たり聞いたりしても、感じ方は違うことが多い。だから、もちろん意見の食い違いが起こることもあります。そこで「自分とは違うから」と聞く耳を持たないのではなく、そういう考えもあるのだなあと、一度受け入れてみるのがとても大事だと思います。

方法は一つではなくてもいいと思います。たくさん方法があった方が失敗してしまった時に、次はこの方法を試してみよう。この方法でダメなら、次はこの方法。というように成功までの道のりを縮めていけるような気がします。

ここで私の体験談をお話ししたいと思います。私は何度かいじめを受けたことがあります。複数人对自分という形ではありませんでしたが、とても辛い思いをしました。

一つは、自分の持ち物を取られたことがあり、「返して！」と言いましたが返してくれなかったことです。普段は何かをされても何も言えないことが多いのですが、この時は勇気を出して「返して！」と言いました。ですが先生が注意をするまでは返してくれませんでした。

他にも、「あなたはあっちに行って。こっちには入らないで」と言われたこともあります。なぜあなたにそんな事を言われなければならないの。そう思いました。きっと友達はいじめようと思って言ったわけではなく無意識に言ったのだ

と思いますが、言われた私はとても傷つきました。

そんな経験があったので、自分が友達と話す時は、傷つくような言葉になっていないかな・・・悲しい気持ちにさせるような言葉になっていないかな・・・と一度考えてから話すように心がけています。「これくらい大丈夫だろう」と思っ
て言ってしまった言葉で人を傷つけることは自分が思っている以上にあるのではないかと感じています。言葉もそうですが、言い方にも注意しなければいけません。自分が同じ言葉や言い方をされたら、どう感じるか・・・それを一度自分の中で考えてから話をするだけでも全然違うと思います。

いじめられた事はとても辛い記憶ですが、その経験のおかげで、人を思いやる気持ちが人を優しくするという事に気づけました。

私の母はとても前向きな人です。失敗をしても、その失敗があったからこんなことに気が付けたよ。と教えてくれます。

ある時、こんな話を聞きました。母が職場の人に「周りのみんなから優しくしてもらえて、本当に助かっている」と言うと、相手の人は「あなたが優しいから、みんなも優しくしてくれるのだと思うよ」と言ったそうです。それを聞いて、自分も相手を思いやる気持ちを大切にしようと思いました。

ですが、自分が気を付けているだけでは、いじめはなくなりません。いじめる理由に、「嫌いだからいじめる」というのを聞くことがありますが、逆を言えば、「私の事を嫌いな人は私をいじめてください」と言っているのと同じではないでしょうか。いじめられて嬉しい人なんて誰もいません。

「あなたをいじめていいですか」と聞かれて「いいですよ」と答える人はいないでしょう。

個性を認め合い、思いやりの気持ちをもつ。中には、周りの助けを必要としていても声に出せない人もいます。その状況に気づいてあげられる。そんな人になりたいと思います。

何十年と続いていくこの先の人生。

みんなが「その人らしさを隠すことなく、自由に幸せを感じて生きていける」「自分と相手の人権を守っていける」そんな強くて優しい社会になって欲しいと願っています。

男女差別が無くなるために私達に出来る事

稚内市立稚内南中学校 1年

佐々木 果凜（ささき かりん）

私たちは普段の生活の中で色々な人権問題と関わっています。いじめや差別、貧困など解決されていない問題が沢山あります。これから私たちが出来る人権問題を解決するための取り組みについて考えていきます。まず初めに人権とは何かについて説明します。人権とは簡単にいうと、誰でも生まれながらに持っている自由に、人間として幸せに生きるための権利の事です。

私たちにも、人権を守り、貧困や差別が無くなるための取り組みが出来ます。まずは自分の周りで実際に起きている人権問題に気付く事です。例えば、いやがらせを受けている子がいてそれを見て見ぬふりをせずに注意をしたり、先生に報告するなど出来る事はあります。次に人権問題を解決しようとしている活動を知る事、伝える事です。実際に問題が解決しないのは、人々が無関心だからだと思います。なので自分自身が世界や、身の周りで起きている問題を知り、関心を持つこと。そしてそれを周囲の人に伝える事が人権問題を止める大きなきっかけになると思います。他にも、「男らしさ」「女らしさ」という観念に穴をあけてみたり日々の生活で人を傷つけたりしていないか振り返ってみたり、自分が自分らしく生きるためにどうすれば良いかなど私たちが今から出来る事も沢山あります。

私は去年札幌の下着屋さんで、高齢男性が楽しそうに下着を選んでいるのを見かけました。見かけは男性ですが、きれいな花柄のワンピースを着て、鏡の前で下着を合わせていました。私も最初はびっくりしました。お店の外を通る人が、男性を見て、コソコソ話して笑っている人もいました。それを見た姉が私と母に「今って多様性の時代なのに、あんな風に笑ってひどいね。」と言いました。私も学校で習ったSDGSを思い出しました。身近な人とのやりとりの中で、意識を変える事が大切だと言われていますが、私も姉に言われた言葉でハッとさせられました。その男性は常連客と見られ、店員さんは、気さくに対応してすごいなと思いました。この男性は、自分らしさを大切に生きる事が出来ているように思いました。このような事があってから私も気にかけてみると気付いた事がありました。それは、日常生活の中でどれほど男女差別は普通のこととして扱われているかです。例えば、家庭内での役割分担について考えてみると、世間的

に女性は家事、男性は仕事という観念が強いと思います。私の家では共働きなので、両親が平等に家事をしているのでそれが当たり前だと思っていましたが、世間では固定された観念がある事に気付きました。実は男女差別の一つだと気付くのは時間がかかりました。ではなぜ、私たちはこのような男女差別が存在する事に気付かないのでしょうか。それは、長い間続いてきた文化などが、私たちの考えに深く根付いているからです。意外と差別は、日常生活の中で無意識に行われている事が多いからその存在に気付かずに、無意識のうちに受け入れてしまっています。それを無くすためにも一番大切だと思うのは、お互いの人権を大切にする意識を持ち、一人ひとりが自分も相手も等しく、それぞれの立場や価値観などの違いを認めて理解してお互いを尊重し合う事だと思います。

私たちの一人ひとりの小さな行動が、大きな変化を生むと思います。人権問題をなくすためには、まず私たち自身が行動を変える事から始める事が大切です。これからの社会が誰でも自分らしく生きていけるために私たちも努力していかなければいけません。

最後に、私が学んだ事は、誰もが公平にチャンスを得られる環境をみんなで作っていくことが大切ということです。すべての人が、自分の可能性を最大限に発揮して幸せに生活できる社会を目指し、一人ひとりが出来ることから始めて、私たち中学生でも、人権を守り、差別がない社会を実現する役割があるので、これからも人権についてよりくわしく考えて、行動し続けていきたいと思っています。

彼女が教えてくれたこと

旭川市立広陵中学校 2年

村上 愛花（むらかみ あいか）

私が小学校中学年だったある日、学校に補聴器をつけた一人の女性がやって来ました。

その方は聴覚に障害をもっていて、今日はその彼女が患っている聴覚障害について、私たちに講話をしてくれると先生が教えてくれました。私は障害をもっている方と関わったことが一度もなかったので、「なんで耳が聞こえないんだろう。」、「耳が聞こえないってどんな感覚なんだろう。」と、聞きたいことがたくさん頭に浮かび、講話が待ち遠しくてたまらなかったのを覚えています。

そしてやっと講話の時間になりました。彼女はまずみんなに手話で挨拶をしてくれました。その手話の流れはとても速く、何を言っているのか考えている間に、手話通訳者の方が通訳して、手話で言っていたことを話してくれました。その流れを見て私は、初めて見る光景だったのでとても驚きました。

挨拶をし終わると、彼女は自分のことについて、たくさん話してくれました。

彼女が患っている聴覚障害は生まれつきだということ。声を発することができないため、幼い頃から手話や指文字、筆談や話し手の口の動きを見て言葉を読み取る口話などの手段で会話をしていること。このことを聞き、全て私たちが使っていない会話方法で、「耳が不自由なだけでこんなにも違うんだ」と驚きました。

次に彼女は、日頃から使っている、耳が不自由な方用の便利な道具を見せてくれました。そこには、彼女がつけている「補聴器」や、来客時のインターフォンやアラームなどの生活音に反応して、光や振動によって知らせてくれる「屋内信号装置」などがありました。耳が聞こえる私たちはもちろん見たことも使ったこともないものだったので、障害者用の便利な道具がこんなにもあることを知らなかったし、聴覚障害以外の障害の方用の便利な道具も見てみたいな、ともっと興味をもちました。

その話題を話し終わると、「次は質問をしていいよ。」と、質問タイムが始まりました。するとクラスメイトが、「耳が不自由で良かったことと嫌だったことを教えてください。」と質問しました。私はそれを聞き、正直嫌だったことしかないんじゃないか、耳が不自由で良かったことなんてあるのかな、とっていました。

た。ですがそれは間違っていて、彼女は、

「嫌なことなんてたくさんあるけど、それ以上にこうして講話を通して、いろんな人に聴覚障害について知ってもらって、障害について少しでも考えてもらえることがとても嬉しいんだ。この講話は耳が聞こえないとできないことだと思うから、そういうときに耳が不自由で良かったなって思うよ。」

と、笑顔で答えてくれました。私はこんな答えが返ってくるとは思わず、とても驚き、感動しました。

もし私が聴覚障害を患っていて、耳が聞こえない状態だったら、親しい人以外との関わりを避け、一人で自宅でできる職業を選ぶだろうと考えました。そんな私とは違い、彼女は、聴覚障害についてたくさんの人に知ってもらいたいという思いで、いろんな学校などの施設を周って講話をしていると知り、とても素敵の方だなと心の底から思いました。

質問タイムも終わり、講話も終わる時間になりました。すると最後に彼女がこう言いました。

「耳が聞こえないからという理由だけで差別されることはよくあることで、とても悲しいけど、それ以上に毎日楽しくて、講話などを通して、障害に少しでも興味をもってもらえることがとても嬉しいの。確かに、耳が聞こえないから普段大変なこともある。けど、障害をもっているみんな同じ『人間』だから、みんなが差別をするような人にはならないでほしい。私も頑張るから、みんなも頑張るってね。」

私はこの彼女の言葉に心を打たれました。とても前向きで素敵な考えを持っている彼女のことを、今でもとても尊敬しています。

この講話で、初めて見るものや初めて知ること、一度も考えたことないようなことがたくさんありましたが、知れて良かったし、いろんなことを考えさせてくれて、とても良い経験だったなど、とても感謝しています。

私はこの経験を通して、障害について知らない人や、差別する人を0にするために、障害者の方と関わる機会を増やし、「障害者の方が住みやすい環境」があることが当たり前な世の中になるようにしていきたいと思います。

障害と人権について

旭川市立春光台中学校 1年
田丸 望結（たまる みゆ）

障害とは何でしょう。障害には「目が見えない」「歩けない」など見てすぐわかるものや「他の人と同じようにできないことがある」「気持ちを伝えることが難しい」「気持ちを抑えることができない」といった外見からはすぐにわからない障害があります。

私には、7つ年上の姉がいます。姉は、知的障害をもっています。今は仕事につくための訓練の作業所に通い、パンを作っています。姉は、身体障害などところがって、見た目では知的障害だとは分かりません。私にとっても普通の姉で、特に障害があるとは思わないで生活しています。一緒に遊んだり、ケンカをしたり、どこにでもいる普通の姉妹です。でも実際には、姉は時間の管理ができなかったり人との関わりが難しかったりします。お金の計算も苦手だし、いつもと違うことがあると対応ができないことも多いです。私は普段、姉がわからないことがあったら教えたり、どうしてもできないことがあったら代わりにやってあげたりします。

車椅子に乗っている、目が見えなくて杖をついてるなど、見てすぐ分かる障害がある人は助けられたり、支援を受けたりしやすい社会になってきています。しかし、姉のような見た目ではわからない障害のある人もたくさんいて、困ったり、差別されたりしていることが多いと思います。

姉は中学校の時に特別支援学級にいて、何もしていないのに「きもい」「こっちを見るな」などと言われたり、帰り道に後ろからついてこられて笑われたり、からかいやいじめを受けたことがあるそうです。特別支援学級にいる、障害がある、ただそれだけで笑われたり嫌なことを言われたりして悲しい思いをしたとのことでした。姉の体験のように、障害があるということで周りの人から差別されるのは、絶対に許されないことです。

本当の障害とは体や心にあるのではなく、日常生活の中で障害のある人が「困ること」が「障害」と言われています。誰もがいつか障害をもつ可能性があります。なので、障害があるということで、区別したり差別したりすることは、あってはならないことです。

姉との生活で経験したように、困っていることや苦手なことがあるのは、誰も

がみんな一緒です。困っている人がいたら声をかけ、必要があれば手助けをすることが当たり前です。私は区別や差別をすることなく、どんな人とでも普通に話したり接したりできる人になりたいと思います。

私の将来の夢は美容師になることです。障害を気にせず誰もが来られるお店を作りたいと考えています。また、お店に来られない方のために、施設などを訪問して髪を切りたいと思っています。

障害のある人を区別や差別することなく、尊重し合って一緒に生活していくことが、障害のある人の人権を守ることになると考えます。

たえないイジメ

美深町立仁宇布中学校 2年

高橋 昊太（たかはし こうた）

ある日、友達がクラスの一部の人たちに、「気持ち悪」「きたない」「近寄ってくるんじゃないねー」などといったひどい暴言が飛び交っていた。そして、僕をふくめ、その事を止める人は一人もいなかった。

その後、暴言の嵐が止んだ時、僕はその子に、「どうしたの?」と聞いてみた。そうしたら、その子は、「分からない。あいさつしたら、急にあんなかんじになった。」と言っていた。そして、とても悲しくて、寂しくて、今にも泣き崩れそうな顔をしていた。そしてその顔を見た僕は、いじめていた人たちへの怒りと同時に自分への、イラ立ちを感じた。だから僕は、次いじめられている所を見た時は、絶対に注意して、絶対にいじめをやめさせると誓った。けれども、次も、またその次もまたまたその次も、いじめをやめさせるところか、注意もできず、見て見ぬふりをしていた。

そして、後悔したので、その日家に帰ってお父さんに友達がいじめられていて、どうしたら助けられるか聞いてみた。そうしたら、勇気を出して声をあげることと言われた。なぜなら、僕以外にも、いじめるのは、どんな理由があれ、だめだと思っている人がいるはずだからだ。

そして、一回目は声をあげることができなかったが、二回目は勇気を出して、声をあげることができた。けれど、いじめていた人たちが、悪く思うかと思いきや笑い始めました。そして、その中の一人が「あまり調子に乗ってるんじゃないぞ。次そういうことを言ってきたら、次はお前をいじめるぞ。」とおどされた。そう言われたら、怖くて、ただ謝ることしかできなかった。そして、その後は、さらに、いじめがエスカレートしていった。僕がとった行動によって、さらに悲しい気持ちになったと思う。本当に声をあげてよかったのかと今も考えてる。

だから、また、お父さんに相談してみた。そしたら、「自分で声をあげたり努力してもできないなら、周りの大人を頼りなさい。周りには、頼りになる先生方がいるじゃないか」と言われた。僕は、たしかに、と思った。次の日、先生に、いじめられている子がいること。そして、いじめられている所を目撃して、叱ってほしいということを伝えたら、分かってくれた。そして数日後、先生がいじめをしている所を目撃して、叱ってくれた。その後、そのクラスでいじめがおこる

ことはなくなった。

僕は、この出来事から、人がいじめをおこさなくするにはについて考えてみた。そして思いうかんできたのは、相手への気持ちになって考えてみるということと思いやりです。なぜなら、相手の気持ちになって、嫌だと思ふのなら、いやな気持ちになる人が少なくなると思ったからだ。そして、思いやりをもつことにより、いい気持ちになれるからだ。今は、いじめなどが多い。でもこのいじめを0にすることはほぼ不可能だと思う。けれど、0に近づけることは可能だ。だから、みんな、いじめの少ない世界にしませんか？

祖父が教えてくれたこと～障害があっても暮らしやすい社会のために～

興部町立興部中学校 1年
鎌田 桐真（かまだ とうま）

障害者とは、「身体障害、知的障害又は精神障害があるため、継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける者」と定義されています。

僕は、障害があっても暮らしやすい社会を作るために、自分には何ができるかを考えようと思います。

一年前に亡くなった僕の祖父は、身体障害者でした。脳出血の後遺症で右半身がまひしていて、身の回りの事や出かける時に少し手伝いが必要な状態でした。でも、僕の祖父は、左手でできることは何でもして、つえを使って自分で一生懸命歩いたり、手すりを使ってトイレやお風呂も自分でやっていました。そして、僕の祖父はとっても物知りで頭が良くて、僕も兄もいろんな事を教えてもらいました。僕がなによりすごいと思うのは、祖父はいつでも優しく、明るくて、家族みんなでとても楽しく過ごせていたことです。祖父の友達もいつも普通に声をかけて、笑い合ったり、昔話など色々な話をしていました。祖父は、体は不自由でしたが、とても幸せだったと思います。祖父の生活から、障害があっても周りの人の支えやバリアフリーなどその人に合った環境、道具があれば安全に安心して暮らしていけるということがわかります。

僕は、もう一つ大切なことがあると思っています。それは、障害者への偏見を持たないということです。偏見とは「偏った見方・考え方。ある集団や個人に対して、客観的な根拠なしにいだかれる非好意的な先入観や判断のことを意味する表現である。」と定義されています。これは、思い込みや決め付けとも言い換えることができ、差別にもつながってしまう可能性があると思います。

僕は、祖父のことを「かわいそう」と言われたり、好奇心だけでじろじろ見られたりするのがとても嫌でした。祖父は、できる事は自分でがんばっていたし、祖父の気持ちは祖父にしか分からないと思ったからです。

障害者への偏見を持つということは、障害を持つ人やその家族に対して、勝手な思い込みで傷つけてしまったり、差別的な見方になってしまうこともあると思います。

障害があってもなくても、人はみんな得意なことや苦手な事があります。人それぞれ個性があって良い所も悪い所もあります。障害だって個性の一つなのだと思います。誰もが偏見を持たずに、みんなの様々な個性を理解して、尊重し、

困ったことがある時に助け合うことができれば、みんなが暮らしやすい社会になると思います。障害があるからといって「できない」「わからない」と決め付けることは絶対にしてはいけないと思います。

僕は、これからも祖父のことを忘れず、人と関わる時には決して偏見を持たずに、みんなの個性を大切にできる関わり方を心がけていきたいと思います。

ファーストペンギン

東川町立東川中学校 2年

西隈 樹里（にしぐま じゅり）

「あ、左利きなんだ」私の弟を見たらみんなこう言います。言った本人には全く悪気はないと思います。ですが私からすると、大切な弟が差別されている気がしてこの言葉がすごく嫌いです。弟が、みんなと同じようにご飯を食べ始めた頃まだどちらが利き手なのかわかりませんでした。母は右利き用のお箸を買いました。ですが弟はそのお箸を左手に持って食べ始めました。スプーンやフォークを右手に渡しても左手に持ち替えて食べ始めます。それに気づいた母は、左利き用のお箸を買うために、右利き用を買った時と同じお店に行きました。すると左利き用のお箸の種類は二種類ほどしかなく右利き用と比べてはるかに数が少なかったそうです。その他のお店にも行き左利き用のお箸を探したそうなのですが、どのお店も圧倒的に種類が少なかったそうです。やっと手に入れた左利き用のお箸を弟に渡してみると、上手に食べ始めました。サッカーボールを蹴る時も、野球のバットを振る時も全て左でやり始めました。左利きが完全に決まった弟を見て母は、

「左利きなのは全然いいんだけど、左利き用の種類が少なかったりしてこれからちょっと大変だね。」と言いました。

それまで左利きに対して深く考えたことはなかったので、左利きの人の苦勞について初めて考えることになりました。

ある左利きの私の友達に書道の時間にみんな右手で書いていたため無理やり「右手で書け。」

と先生に言われ、利き手ではない方で書かされていたそうです。また、私の従姉妹も左利きですが、食事の時には利き手が違うと腕が当たってしまうので座る位置を考えなければならないし、横書きのノートを取る時は手が汚れてしまったりと、右利きの人を優先した作りになっているのが多いことに気づきました。

またその従姉妹が小学生の時、体育の時間に右利きの人を想定して先生が説明していたのですがわからなくなって授業が一旦ストップしてしまった時があったそうです。その時周りの子の中に、

「はあ。」

と大きなため息をついたり、早くしてよと圧をかけるような雰囲気になったこ

ともあったそうで、悲しい気持ちになったと言っていました。

これらのように左利きの人の苦労は大きいですが、現在は左利きの人のための道具がいろいろと出てきています。例えば左利き用のハサミや手帳、扇子まであります。ですが、私の弟のお箸のように探すのにはやはり苦労します。

これは、「左利きの人の人口は少ないから別に問題はない。」このような考えがあるからではないでしょうか。多数派だけが楽をして良いのでしょうか。これは間違っていると私は思います。世の中にはいろんな人がいて、その一人ひとりに素晴らしい個性があります。左利きであることもその人の大切な個性だと思います。その個性をもっと大切にすべきです。

私は右利きなので、左利きの人の思い、苦労、全てを知ることはできません。

ですが、考えることはできます。左利きの人に対しての悪気のない差別だってそうです。自分がその立場だった時のことを考えることさえできれば、あたり前のこととして受け入れることができるでしょう。

そしてこれは、利き手に関してだけではありません。いじめ、高齢者問題、戦争などなど、まず考えることが大切なのです。

私たちは、大幅に世界を変えることはできなくても、身近ないじめを解決したり、困っている高齢者や障がい者を助けたりなど、考えて今を全力で生きるからこそできることは無限にあります。

私は醜い争いや差別、偏見をこの世の中から少しでもなくしたいと思っています。そのためにも、みなさんの協力が必要なのです。

みなさんはファーストペンギンという言葉を知っていますか。集団で行動するペンギンの群れの中から、天敵がいるかもしれない海へ、魚を求めて最初に飛び込む果敢なペンギンのことです。私と一緒にぜひ、ファーストペンギンになってください。そのあなたの想いと行動が良い世界の第一歩となることでしょう。

自分の人権も相手の人権も大切に

苫前町立苫前中学校 1年

上田 茉奈（うえだ まな）

私は、「人権」という言葉を聞いて、頭の中に「障害者への差別」という言葉が浮かびました。

皆さんは「障害者差別」という言葉を聞いた時、どのようなことを思い浮かべますか。

社会の理解が浅い人権問題、その中の一つ「障害者差別」があります。「障害者」に対して皆さんは無意識に差別や偏見をしていませんか。そして、自分の人権を大切にできていますか。

そもそも人権とはこの世界の人々、全員が持っているもので、どこにいても誰にでも尊重され、守られるとされているものです。

「十人十色」という言葉があるようにみんな違った色を持ち、みんな違った考えを持っています。金子みすゞさんの言葉を借りるなら「みんなちがってみんないい」だと私は思います。

では、実際のところはどうか。

先日、インターネットで全国地域生活支援機構の「障害のある方への差別という問題」という記事を読みました。この記事には、障害のある方やそのご家族の方が実際に差別と感じた事例が記載されていました。そこには、「障害者用の駐車場の利用について、車椅子の人のみ使用可能と警備員に言われ、警備員ともめた」「公共施設のほとんどの場所で、障害者用トイレは男女兼用。設置場所もトイレの入口付近にあることが多い」という事が書かれていました。

正直、私は障害者専用の駐車場には車椅子マークが書かれているので、私も車いす専用の駐車場だと思っていました。

その時点で私は、障害者専用の駐車場ではなく車いす専用の駐車場だという思い込みをしてしまっていたのでした。実際見ただけでは判断しにくい障害を持っている方にとっては利用を禁止される可能性は十分にあります。その時に差別が生まれてしまうのでしょうか。

公共施設のトイレについても認識の違いを考えさせられました。

私は、男女兼用であることを気にしておらず、入り口付近にあることにも何の違和感もありませんでした。施設側は介助者が一緒に入りやすいようにとの配

慮で男女兼用にしているものだと思っていたし、設置場所も入りやすいように入り口付近に設けているのだと思っていました。でも違いました。実際に利用する側の気持ちとそうではない人の考えには大きな違いがあり、そこから無意識に差別が生まれていることもあることに気づかされました。

度々ニュースでは、障害者施設で利用者への対応の問題や、障害者へのいじめの問題などが取り上げられますが、そういった大きな問題以外でも身近なところで差別は生まれていました。

そもそも、障害者に対して「可哀そう」とか「大変そう」とか思うことは迷惑な話なのかもしれません。

不自由な部分はその人の個性であり、いざというときに手助けすればよいのです。

もちろん私にも苦手なことがたくさんあります。私以外にもたくさんの方が得意ではないことがあると思います。ですが、それを周りの人が受け止め、理解してくれれば差別はおきないはずです。

私が小学四年生の時、総合の授業で「福祉疑似体験」というのがありました。福祉疑似体験では、目が不自由な人や体が不自由な人の体験をする授業です。私はこの体験をして目や体が不自由な人は私が今まで思っていたより大変だと知りました。例えば目が不自由な人は、周りの景色が見えず、「不安だな。」と思いました。他にも車椅子で段差を通ったり坂道を登ったりしました。私は車椅子を体験して、今まで私が使わなかったスロープがとても役に立つことが分かりました。他にも介助者がいないと坂道を登ったり、段差を通ったりするのがとても大変なことが分かりました。

今回、人権作文を書くことを通して、私は障害者への差別をなくすには、それぞれの個性を尊重し、また相手の立場になって考えることがとても大切だということが分かりました。

自分にとっての当たり前は、相手にとっての当たり前ではないこともあるかもしれません。

それは、健常者でも障害者でも同じことが言えます。障害者だからといってなにか特別というわけではないのです。

「みんなちがってみんないい」という考えをみんなが共有できれば障害者への差別は必ず減っていくと思います。私は、これからもこの考えを大切にしていきたいです。